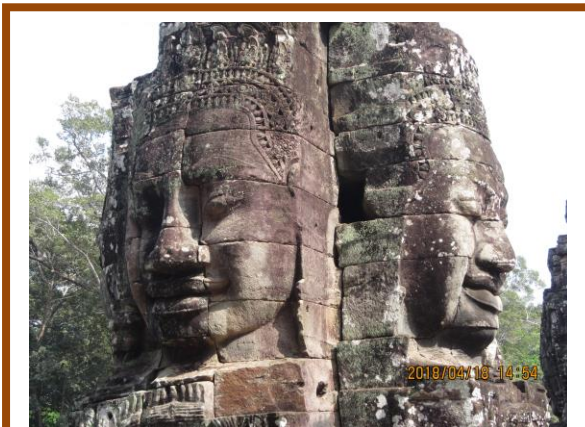


## インドシナ旅日記

アンコール・ワットの2日目は忙しい一日でした。早朝暗いうちからホテルを出て、朝日に映えるアンコール・ワットを期待しました。結局に雲に阻まれて朝日は拝めませんでしたけど、日が昇ってアンコール・ワットの内部を見て歩き、一度ホテルに戻って朝食をとり、連れ合いたちが一休みする間に、国立博物館に行き、ついでに街中を歩きました。

カンボジア料理のレストランで昼食をとり、そのままアンコール・トムに行ってバイヨンや象のテラスを見、夕方近くにはもう一度アンコール・ワットに戻って、夕日に映える伽藍と仏像に見惚れて、夕食はどうゆうわけかアマゾン・シェムリアップという変な名前のレストランで、アプサラダンスショーを見ながらバイキング式のカンボジア料理と中華料理を食べて、この日のプログラムを終えました。

### 8. 「アンコール・トム」



アンコール・トムのハイライトはやはりこの、バイヨン寺院の石造の四面観音菩薩像でしょう。でも、この仏教寺院のシンボルとなっている仏像も、一説によるとヒンドゥー教の主要3神の一人ブラフマーだとも言われていた。

アンコール・ワットは宗教施設でしたがアンコール・トムは都城ですから寺院とは別に王宮もあります。宗教施設の方は当然のことですが、時の宗教の様式で作られることになります。12世紀末に時の王によって建設が始まった時は仏教寺院だったのですが、次代の王はヒンドゥー教寺院に変更しました。

当時のカンボジア国史を学ぶには相当な時間がかかると思いますが、飛鳥時代の壬申の乱から大化の改新に続く日本の国史、特に神道と仏教の確執や都城遷都のいきさつなどに、どこか通じるような気がします。バイヨン寺院第1回廊のレリーフには王の功績を誇示する隣国との闘いの場面が描かれていますが、その隣国チャンパとは現在のヴェトナムにあった、同じインドの影響を受けた王国でした。

アンコールとはカンボジア語で城壁に囲まれた町を意味しています。ワットは寺院のこと、トムは「偉大な」という意味です。アンコール・トムはだから、(王様の住む) 大きな町という感じでしょうか。

アンコール・ワットが東西1.5キロ、南北1.3キロなのに対して、アンコール・トムは3キロ四方のほぼ正方形の史跡群です。



遠くに見えているアンコールトムの南大門に続く参道の両側には、アンコール・ワット第1回廊にあった天地造像(乳海攪拌)のレリーフが、壁から飛び出しています。



バイヨンの第1回廊の壁面を飾っているのは、この国の戦いの歴史を物語るレリーフです。アンコール王朝のクメール軍と宿敵チャンパ国軍だけでなく、敵か味方か中国王朝軍も登場します。このレリーフも、ゆっくり1日かけて鑑賞したかったです。

興味深いことにこのレリーフには、中国人が軍人だけでなく商人なども登場しています。当時、現在のヴェトナムとカンボジアが何度も死闘を演じていたことも重要ですが、その向こうには中国の覇権が見え隠れしているのです。これも日本の古代史に例えれば、朝鮮半島との確執の陰に中国があったことに思い当たります。

日本史と重ねて見るついでに、カンボジアの当時の国力の基盤は何かと考えてみました。素人の考えですが、ここでも日本と同じく稲作による農業生産力に思い至ります。カンボジアのコメは中粒種のインディカ米ですから、ヒンドゥー教

とも繋がってきます。その目でカンボジアの地図を見ると、ヴェトナムに比べても遥かに有利な地形になっています。カンボジアとヴェトナムの間のいざこざは、クメールとチャンパの時代からメコンデルタの争奪戦だったということにも合点がいきますね。

アプサラダンサーズの姿も、日本でのアメノウズメノミコトだけでなく、田植え祭に登場する早乙女にも通じる気がしてきました。それにしても日本とカンボジアには心の深層部分で通じるものたくさんがある気がしてきました。

ところで今回、我々のツアーについてくれた現地ガイドのトム君、日本に来た事は一度

もないのに、とても流暢な日本語を使いこなします。その上、彼はほとんどオタクではないかと思えるほど遺跡の歴史的な知識に通じていて、さらに遺跡をこよなく愛し、



アプサラダンサーズはカンボジア美人のシンボルとして遍在しています。ここでも当時（12～13世紀）の王朝が仏教とヒンドゥー教の間で揺れていたのではないかと思います。翻って古代の日本に想いを馳せれば、仏教が伝わった時、オリジナルの神道への執着と、新しい仏教へのあこがれの中で、揺れ動いた当時の日本人の姿が重なって見えます。



観音菩薩であれ、ブラフマー神であれ、アルカイック・スマイルを浮かべた柔和なお顔のそばにいただけで、誰もが自然と笑顔になれるようです。

遺跡の歴史的価値に誇りを持っていました。わたしが少し予習をして来ていることに気が付くと次第に説明に熱が入り、滞在が短すぎると何度も不満を口にしました。まるで、わたしの気持ちを代弁してくれているようでうれしかったです。

単に仕事でガイドするのではなく、自分の国への誇りと愛着を持って案内してくれていると、それがわたしたちにも伝わってきて、わたしたちの気持ちを高揚させてくれもします。たまたま、遺跡と同じ名前のこの青年ガイドに出会えたことがわたしたちの幸運でした。

世界中どこの遺跡でもそうですが、落書きと盗掘はここシエムリアップの遺跡群でも、悲しいことに目立ちました。古い石造りの仏像の中には、首のないものがたくさんあります。全体を持ち出すには機械が必要でも、仏頭だけなら持ち出すことができたのでしょうか。どうせ、ヨーロッパの著名な博物館の所蔵になっているか、オークションに出品されて金持ちの好事家の玩物になっていることでしょう。

もっとも今では遺跡の一部と化して、歴史的価値となっている、われらが森本右近太夫の墨書も書かれた当時は立派な落書きだったのです。今日の東大寺の柱か壁に、外国人が



古い仏像の多くは首を盗まれていました。全体を持ち出すことは不可能でも、仏頭だけなら持ち出せたのでしょうか。どんな罰当たりがやったのかは見当もつきませんが、世界中のオークションにかけられる仏頭の中にも、こんな出自のものがあるかもしれません。(アンコール・ワット)



アンコール・ワットに奉納された新しい仏像を夕日が輝かせ始めました。石造りの寺院で、よくもこんな演出をしたものだと感心させられました。



観光地でもドリアンを売っていましたが、買うのはあきらめました。わたしは好きなのですが、何せホテルには持ち込み禁止ですし、途中のレストランでも食べさせてはもらえませんので。

墨で大書を残したとしたらと思うと、つい考え込まれてしまいました。

インドシナに来たらぜひ食べなければと思っていましたドリアンは、とうとう旅の最後まで口にするにはできませんでした。まだ走りだったので、あっちこっちで売っているものが青かったのと、何せホテルへの持ち込みができませんので、まさか道端で割って食べるわけにもいかず、涙をのんだ次第です。アンコール・ワットではタガメも売っていましたが、こっちも連れ合いに引っ張られて素通りでした。残念無念。